

妹が教えてくれたこと

都留市立都留第一中学校三年 谷内 葉南

「あの人変じゃない?」「あいつ障害じゃね?」私はそんな言葉を耳にすると、胸が痛くなる。なぜなら、私には知的障害の妹がいるからだ。私とは、9歳年が離れている。妹は双子で小さく生まれ、赤ちゃんの頃から成長が遅かった。やっと歩けるようになったのは、2歳になってからのことだった。そして、3歳の時に知的障害だと診断された。

妹が障害だと分かった頃、私は妹のことがあまり好きではなかった。言葉は何もしゃべれず、何を言っても反応しない。家から突然飛び出してしまったり、訳もなく何時間も泣き続けたりした。一緒に出かけた時は、周りから変な目で見られたりすることもあった。母も妹の面倒を見ることがとても大変そうで、そんな母を見ていて辛くなったりもした。そして、私が一番嫌だったことは、学校の友達や身近な人に、妹が障害者だということが知られてしまうことだった。私も、妹と同じだと思われてしまうのではないか。変だと思われてしまうのではないか。私は、そんなことばかり考えてしまった頃があった。

しかし、私の母は私とは違い、周りの人に妹の障害のことを隠さずに伝えていた。私はなぜ周りの人に知らせるのか、母の気持ちがわからず、そんな母を見て恥ずかしいとも思った。そんな、私の気持ちに母は気がついたのか、ある日、母と妹の事について話し合ったことがあった。母は、妹が笑顔で暮らしていけるようにするためには、周りの人に妹の障害のことを理解してもらいたいと、思っていること。障害の子供をどうやって育てていけば良いのか、とても悩んでいること。家族みんなが妹が成長できるように、たくさん関わってあげてほしいと思っていることも話してくれた。私は母と話してから、妹に対する気持ちが変わった。妹にたくさん話しかけたり、妹とたくさん遊んだ。それまで、私は勝手に、妹は何もわからない、何もできないそう決めつけていたのだと思う。でも、たくさん関わることで、妹がゆっくりではあるけれど、少しずつ成長していることを感じた。

ある時、妹が私のことを「ねえね」と呼んでくれた。私はとてもうれ

しくて、飛び上がって喜び、涙がでてきた。そして、妹のことが、可愛い、大切、という気持ちでいっぱいになった。

今、六歳になった妹は理解できる言葉も増え、たどたどしいが会話もできるようになった。以前のように泣き叫ぶことも少なくなり、自分で色々なことができるようになった。妹がそんなふう to 成長できたのは、家族、保育園の先生、病院の先生、リハビリの先生などたくさんの人が妹を支えてくれたからだと思う。私は、そんなたくさんの人達に感謝の気持ちでいっぱいだ。

妹は、私たち家族にとって大切な存在だ。いつも、家族みんなを笑顔にさせて、楽しませてくれる。私は、そんな妹が可愛くてたまらない。そして今は、私も母と同じように妹のことをたくさんの人に知ってもらいたいと思っている。障害があってもなくても関係ない。障害者も、障害者の家族も一生懸命暮らしていて、とても幸せだということを知ってもらいたい。

私もそうだったように、心のどこかでまだ障害者に対して差別や、偏見がある世の中だと思う。障害を持った人がもっと、みんなからあたり前のように受け入れられる社会になれば、障害の人も、暮らしやすい世の中になっていくと思う。みんなそれぞれ違う人なのだから、自分と少し違うからといって、変だと決めつけないでほしい。自分と相手との違いを受け入れることで、差別や偏見がなくなる世の中になっていくと思う。

私は将来障害者も、障害者の家族も幸せに暮らしていけるような、手助けができる人になりたいと思っている。そのためには、もっと障害のことについて理解を深める努力をしていきたい。そして、すべての人が幸せに暮せ、優しさや思いやりにあふれた社会になることを願っている。